

発刊にあたって



根室農業改良普及センター
所長 田中義春

昨年は環太平洋経済連携協定(TPP)に多くの農業者が反対する中、交渉参加へ向けて関係国と調整に入りました。先行き不透明な部分もありますが、これからのような方向へ進むとも根室農業を発展させていかなければいけません。

管内の農畜産物販売額は生乳が大部分を占め、計画乳量を生産することは農業者の所得確保と地域を活性化する源でもあります。普及センターでは生乳生産を予測し、毎月の実績とシミュレーションをホームページで公開しています。本年度においても昨年度に引きつづき目標を達成することが難しい状況にあります。

今後、農業者の意向をふまえ、農協など関係団体と連携を図りながら安定的な乳生産へ提案型の普及活動を推進していきます。

- 1、世界的な資源や穀類等の逼迫を反映し、より一層の自給飼料に立脚した経営が求められ、栄養価の高いサイレージの収穫調製技術を推進する。
- 2、経営の大型化が進む一方で高齢化の進行と、それに伴う離農による生産力の低下がみられ、地域支援システムの育成や再構築を図る。
- 3、地域を存続させるためには担い手の育成と女性の活動を活性化すべきで、4HC員、新規参入者、女性グループなどの学習や交流の場を設定する。

また、良質乳生産、農畜産物の付加価値、・・・など、様々な課題を解決する考えでいます。

一方、世界的な温暖化傾向の中、気温の低い根室管内においても牛の暑熱ストレスが問題になってきました。猛暑に見舞われた平成22年における乳用牛の日射病、熱射病の発生件数は北海道285件、内根室管内は61件と振興局で2番目に多い被害でした。

乳量や乳成分が低下し乳房炎や体細胞が増えて受胎率が極端に落ち込むなど、繁殖にまでマイナスの影響を与えました。結果として、去年は分娩頭数が減り、期待していた乳量を搾ることが難しく酪農経営を圧迫しました。

今回はこの反省から地域の実態を基に事例を含めて、現場の酪農家が実践可能な事項としてまとめてみました。是非、この冊子を活用して暑さに弱い牛を徹底的に管理し、目標とする生産乳量の達成を願っています。